



逗子に住まいのあった作家で

芥川賞や直木賞の受賞者はいるか

芥川賞を受賞したのは  
中里恒子、多田裕計、堀田善衛、  
石原慎太郎、林京子、辺見庸（受  
賞年順）の6名です。

直木賞の受賞は佐藤得二、高  
橋治、伊集院静、なかにし礼の4  
名です。

それぞれの作品や逗子との関  
わりについてご紹介します。

芥川賞・直木賞作品と著者の情報	請求 記号
<p><b>直木賞 昭和 58(1983)年下期</b></p> <p>『秘伝』 講談社 1984年</p> <p><small>たかはし おさむ</small> <b>高橋 治</b> 昭和 4(1929)年～平成 27(2015)年</p> <p>千葉県生まれ、小説家、映画監督。昭和 28(1953)年松竹入社。茅ヶ崎に自分の家を持ちながら逗子で借家住まいをしていた。直木賞受賞の『秘伝』では2人の老漁師と魚とのロマンが描かれている。</p>	<p>ZY Fタ</p>
<p><b>直木賞 平成 4(1992)年上期</b></p> <p>『受け月』 文藝春秋 1992年</p> <p><small>いじゅういん しずか</small> <b>伊集院 静</b> 昭和 25(1950)年～令和 5(2023)年</p> <p>山口県生まれ。小説家。昭和 53(1978)年から昭和 59(1984)年までを逗子海岸のなぎさホテルで過ごした。この時期のことを作品『なぎさホテル』の中で「このホテルで暮らした7年余りが一番本を読んだ時期」であり、「あの海岸を歩く時刻がずれていれば、小説家にもならなかつただろうし、ひょっとしてもうこの世にいなかったかもしれない」と振り返っている。</p>	<p>ZY Fイ</p>
<p><b>直木賞 平成 11(1999)年下期</b></p> <p>『長崎ぶらぶら節』 文藝春秋 1999年</p> <p><small>なかにし れい</small> <b>なかにし 礼</b> 昭和 13(1938)年～令和 2(2020)年</p> <p>中国黒龍省(旧満州国)生まれ。小説家、作詞家、演出家。大学在学中よりシャンソンの訳詞を手掛け、作詞家として活躍。その後ミュージカル、クラシック、舞台演出や脚本にも活動を広げた。平成 10(1996)年より逗子に転居。</p>	<p>ZY Fナ</p>

逗子の文学

芥川賞・直木賞作品と作家



河津桜（大崎公園） 写真：逗子フォトより

逗子市立図書館

046-871-5998

逗子市に関するレファレンス事例は、逗子市立図書館ホームページで閲覧できます。

<https://www.library.city.zushi.lg.jp>

芥川賞・直木賞作品と著者の情報	請求 記号
<p><b>芥川賞 昭和 13(1938)年下期</b> 『乗合馬車』『日光室』</p> <p>『わが庵』に収録 文芸春秋 1974 年 なかざと つねこ <b>中里 恒子</b> 明治 42(1909)年～昭和 62(1987)年 神奈川県藤沢に生まれ、横浜に育ち、川崎の女学校を卒業。軽い肺結核養生のため逗子に転地し、以後生涯を過ごした。逗子の日光あふれる家に愛着を持ち、その静かな暮らしは中里文学を生み出す母胎でもあった。日常生活を大事にした中里の心は、多くの随筆に表現されている。</p>	ZY Fナ
<p><b>芥川賞 昭和 16(1941)年上期</b> 『長江デルタ』</p> <p>『多田裕計句集』に収録 角川書店 1980 年 ただ ゆうけい <b>多田 裕計</b> 大正 1(1912)年～昭和 55(1980)年 福井県生まれ。小説家、俳人。昭和 24(1949)年に逗子海岸に小居を得、以来逗子に住む。昭和 37(1962)年 10 月から逗子市社会教育委員を2期8年間務め、図書館充実に尽くした。</p>	ZY 911.3 タ
<p><b>芥川賞 昭和 26(1951)年下期</b> 『広場の孤独』『漢奸』</p> <p>『堀田善衛全集 1』に収録 筑摩書房 1974 年 ほった よしえ <b>堀田 善衛</b> 大正 7(1918)年～平成 10(1998)年 富山県生まれ。小説家、評論家。昭和 24(1949)年に逗子に転居した。国際作家として活躍し、スペインに断続的に住む期間もあったが、日本での住まいは終生逗子とした。</p>	ZY 918.6 ホ 1-1

芥川賞・直木賞作品と著者の情報	請求 記号
<p><b>芥川賞 昭和 30(1955)年下期</b> 『太陽の季節』 新潮社 1956 年 いしはらしんたろう <b>石原慎太郎</b> 昭和 7(1932)年～令和 4(2022)年 兵庫県神戸生まれ。小説家、政治家。元東京都知事。父親の転勤に伴い、昭和 19(1944)年に逗子に転居する。青春時代を過ごした逗子をこよなく愛した。『目の前の田越川でハゼは入れ食い、川床には牡蠣がびっしり(中略)私自身も青春を他の土地で過ごしていたら、あした作品を描いて世の中に出ることはなかったろう。故にも私は自分の本籍を逗子に移した。それにしても自らの青春を湘南という土地で、この国の青春に重ねて過ごせたことは私にとって至福だったと思う。』 「湘南の素晴らしさ-日本のコートダジュール-」より引用 『かまくら春秋 平成 21 年』(Z29.Kカ 09) に収録</p>	ZY Fイ
<p><b>芥川賞 昭和 50(1975)年上期</b> 『祭りの場』 講談社 1975 年 はやし きょうこ <b>林 京子</b> 昭和 5(1930)年～平成 29(2017)年 長崎県生まれ。小説家。父親の仕事の都合で 14 歳まで上海で暮らした。昭和 20(1945)年 8 月 9 日学徒動員中に爆心地から 1.4 キロで原爆被災した。その時の体験をもとにして『祭りの場』を発表し、受賞となった。 昭和 26(1951)年に結婚し、その後逗子に移り住む。昭和 43(1968)年から住んだ沼間の家は、高速道路建設のために昭和 54(1979)年に立ち退きを迫られるまで過ごし、『谷間の家』『父のいる谷』『谷間』の舞台となった。</p>	ZY Fハ

芥川賞・直木賞作品と著者の情報	請求 記号
<p><b>芥川賞 平成 3(1991)年上期</b> 『自動起床装置』 文藝春秋 1991 年 へんみ よう <b>辺見 庸</b> 昭和 19(1944)年～ 宮城県石巻生まれ。小説家。共同通信社に就職後すぐに横浜支局に配属され、相模の海と出会い、逗子に移り住んだ。 『田越川沿いに海に向かって歩いていくと、道は狭いし、うねうねうねっているけれど、逗子というところもなかなか捨てたものでないと思う。…足はひとりでに川を下るのである。すべて、いずれは海へ。心はいつも、そう思っている。』 「とても不思議な帰一感-相模の海を愛し続けて-」より引用 『月刊かながわ』平成 5(1993)年 2 月号(Z31.Aゲ 93)に収録</p>	ZY Fへ
<p><b>直木賞 昭和 38(1963)年上期</b> 『女のいくさ』 二見書房 1978 年 さとう とくじ <b>佐藤 得二</b> 明治 32(1899)年～昭和 45(1970)年 岩手県生まれ。盛岡中学、第一高等学校を経て東大哲学科を卒業。哲学者、教育家の道を歩み、文学とは無縁の半生だった。逗子を住まいとし、初の小説作品『女のいくさ』にも逗子が登場している。病気がちで自宅で静養していたが、次作を書くことなく、昭和 45(1970)年に死去した。</p>	ZY Fサ